

学 会 記 事

特定非営利活動法人日本火山学会 平成 23 年度臨時総会議事録

1. 日 時: 平成 23 年 10 月 3 日 (月)
午後 3 時 45 分から 4 時 30 分
2. 場 所: 旭川市・大雪クリスタルホール・大会議室
3. 出席者: 維持会員 37 名, 有効委任状数 93 通
合計 130 名
4. 議 案:
 1. 平成 23 年度事業経過報告の件
 2. 学生優秀発表賞の件
 3. 議事録署名名人承認の件
5. 議事の経過の概要および議決の結果
出席者(委任状を含む)が 130 名で, 定足数 94 名を超えていることを確認し, 議長(定款により学会の会長)が平成 23 年度日本火山学会臨時総会の開会を宣言した。
 - (1) 第一号議案 平成 23 年度事業報告の件
平成 23 年度の事業について各担当理事からの報告(資料 1)に基づき議長が諮り, 全員異議なくこれを了承した。
 - (2) 第二号議案 学生優秀発表賞の件
2011 年度秋季大会における学生優秀発表賞の受賞者について報告(資料 2)がなされ, 全員異議なくこれを承認した。
 - (3) 第三号議案 議事録署名名人承認の件
議長より本日の議事をまとめるに当たり, 議事録署名名人 2 名を選出することを諮り, 武尾 実氏および鍵山恒臣氏を選出することを全員異議なく承認した。
以上, この議事録が正確であることを証します。
平成 23 年 10 月 3 日

議 長 中田節也 印
議事録署名名人 武尾 実 印
議事録署名名人 鍵山恒臣 印

(資料 1) 平成 23 年度事業経過報告

(1) 庶務委員会(大湊理事)

1. 入退会希望・会員数について

	維持	学術	一般	団体	名誉	計
2011 年連合大会後	280	688	41	14	9	1,032
入会承認	3	27	0	0	0	30
会員継続	1	8	0	0	0	9
逝去	1	1	0	0	0	2
除名	3	10	0	0	0	13
2011 年秋季大会総 会后	280	712	41	14	9	1,056
2011 年度退会予定	0	2	0	0	0	2

春季総会(連合大会)時点での除名対象者 21 名のうち 8 名から 8 月末までに会費が納付されたため, 除名者が 13 名と減少した。

2. 主催・共催・協賛・後援について

協賛 1 件

- ・国際地学オリンピック(NPO 国際地学オリンピック日本委員会)

共催 1 件

- ・第 55 回粘土科学討論会(主催: 日本粘土学会)
- 後援 1 件
- ・第 2 回日本ジオパーク洞爺湖有珠山大会(主催: 第 2 回日本ジオパーク洞爺湖有珠山大会組織委員会・財団法人自治総合センター)

3. 人事公募について

6 件の人事公募について「火山」に掲載を行った。

4. 学会ホームページ・サーバ移転について

現在は, 国立情報科学研究所・学協会情報発信サービスによりホームページの運用しているが, 平成 24 年 3 月 31 日をもって同サービス終了のため, 学会独自にサーバをレンタルし運用する必要がある。

(1) レンタルサーバの候補

- ・さくらネット・プレミアムコース
月額 1,500 円 / 容量 40 GB
IAVCEI2013 のホームページでも利用
- ・さくらネット・ビジネスコース
月額 2,500 円 / 容量 80 GB
権限の付与など複数人管理に対応

(2) 移行スケジュール

- ・12 月前後: レンタルサーバ契約

- ・契約後 2-3 週間: 新規サーバ上でのホームページ立ち上げ作業
- ・1-3 月: 既存サーバと新規サーバを並行運用
- ・3 月末: 既存サーバの廃止, 新規サーバへ完全移行

(2) 編集委員会 (寅丸理事)

1. 「火山」発刊状況について
【56-2・3 合併号】 2011 年 6 月 30 日発行
2. 「火山」発行予定・掲載予定原稿について
【56-4・5 合併号】 9 月末発行予定

○通常論文

寄書 No. 1014 後藤芳彦・佐々木央岳・鳥口能誠・
畠山 信

寄書 No. 1027 後藤芳彦・松塚 悟・亀山聖二

寄書 No. 1028 後藤芳彦・城森 明

寄書 No. 1029 後藤芳彦・合地信生・松田 功

寄書 No. 1030 後藤芳彦

口絵写真解説 No. 1103

金子隆之・大湊隆雄・小山崇夫・
武尾 実・渡邊篤志・嶋野岳人・
柳澤孝寿・青木陽介・安田 敦・
本多嘉明

書評 No. 1110 藤縄明彦

3. 査読編集状況について
現在査読編集集中の原稿: 計 10 編 (論説 8 編, 寄書 2 編)
IUGG メルボルン大会に火山学会の支援で参加した若手は報告を行うよう呼びかけがなされた。
4. 桜島火山特集号について
投稿状況 (2011 年 9 月 26 日時点): 計 12 編 (論説 9 編, 総説 1 編, 寄書 1 編, 解説・紹介 1 編)
締切日当日 (9 月 30 日) の 10 時現在で 15 編であったため, 最終的には 20 編程度となる見込みである。
- (3) 事業委員会 (星住理事)
 1. ロゴマークの普及について
火山学会ロゴマークの普及のため, ロゴマーク入りマグカップの販売を行っている。
 2. 第 12 回地震火山子どもサマースクールについて
第 12 回地震火山子どもサマースクール「磐梯山のお宝さがし」が開催された。
 - ・日程: 8 月 6 日 (土), 7 日 (日)
 - ・活動場所 猪苗代役場, 磐梯山周辺, 国立磐梯青少年交流の家など
 - ・主催: 公益社団法人日本地震学会, 特定非営利活動法人日本火山学会, 日本地質学会, 磐梯山ジオ

パーク協議会

- ・後援・協賛: 内閣府, 文部科学省, 国土交通省, 消防庁, 気象庁, 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター, 福島県, 福島県教育委員会

・参加者: 21 名 (小学 5 年~高校生)

日本火山学会は 20 万円助成を行った。その他の助成は日本地震学会 30 万円, 日本地質学会 20 万円, 国立青少年教育振興機構 (子どもゆめ基金助成金) 118 万円。

来年度は, 糸魚川で開催予定。

(4) 大会委員会 (松島理事)

1. 2011 年度秋季大会について

・発表数: 188 件 (昨年度秋季大会: 151 件)

・参加者数: 273 名 (昨年度 224 名)

2. 2012 年度日本地球惑星科学連合大会について

現在, セッション提案を受付中 (10 月 25 日締切) 現在予定中のセッション:

・活動的火山 (提案母体: 日本火山学会)

・火山・火成活動とその長期予測 (提案母体: 地質学会・火山学会)

・火山の熱水系 (提案母体: 地熱学会・火山学会)

・火山噴火のダイナミクスと素過程 (コンビーナ: 小園誠史・鈴木雄治郎・奥村 聡)

・津波堆積物 (コンビーナ: 後藤和久・宍倉正展・西村裕一 / 提案母体: 地質学会・地震学会・地理学会・堆積学会・第四紀学会・活断層学会・火山学会)

そのほか, 火山防災関連などを検討中。

3. 2012 年度秋季大会について

・会場: 長野県御代田 エコール御代田

・日程: 2012 年 10 月 14 日 (日) から 16 日 (火)

・主催: 日本火山学会・浅間縄文ミュージアム

・LOC: 東京大学地震研究所・日本大学

・現地討論会: 浅間山・草津白根山

・火山防災シンポジウム: 10 月 13 日 (土)

4. 2013 年度秋季大会について

・磐梯で開催予定

(5) IAVCEI2013 委員会 (篠原理事)

1. 2011 年度前期の活動について

・実行委員会 2 回 (5 月 26 日 (幕張), 11 月 2 日 (旭川)) および組織委員会 1 回 (7 月 11 日 (鹿児島)) を開催した。

・6 月に大会ロゴの作成・ホームページの立ち上げ, 1st サーキュラー出版, ポスター作成等を行った。

・IUGGにおいて大会の案内（ポスター・ブース・サーキュラー配布）を行った。この際、若手渡航補助金を11名に支出した。

7月11日 第2回組織委員会（鹿児島）

8月からセッションの募集を開始した（12月末締切）。

2. 2011年度後期の活動について

第5回実行委員会を2012年1月に鹿児島で開催予定。

4月に会議業者に業務委託、8月に2ndサーキュラーのweb公開の予定。

3. IAVCEI2013 ホームページについて

ホームページ URL およびトップページのデザインの紹介がなされた。 <http://www.iavcei2013.com/index.html>

(6) 学校教育委員会（林理事）

1. 第18回公開講座について

秋季大会において第18回公開講座「火山学者と火山を作ろう！ マグマのおもしろ実験教室 in 旭川」を開催した。

参加者：48名

実施内容：黒曜石の発泡実験・コーラと魅の火山灰実験・コンデンスミルク溶岩・歯科印象材による成層火山の作成

公開講座においてアンケート、ヒアリング、子どもの発言の観察、ビデオ記録、音声記録を行った。

今後、複数のソースを活用して教育的な解析を行う予定。

(7) 財務委員会（森理事）

1. 会費未納状況について

・2011年8月31日時点における会費未納

未収金	2009年度	2010年度	2011年度	合計
維持会員費 ・1年未納	0	0	255,000	255,000
維持会員費 ・2年未納	0	30,000	30,000	60,000
維持会員費 ・除名対象	20,000	20,000	20,000	60,000
学会会員費 ・1年未納	0	12,000	636,000	648,000
学会会員費 ・2年未納	0	245,000	248,000	493,000
学会会員費 ・除名対象	88,000	88,000	88,000	264,000
一般会員費	0	0	36,000	36,000
団体維持会員費	0	0	260,000	260,000
団体一般会員費	0	0	140,000	140,000
合計	108,000	395,000	1,713,000	2,216,000

・2010年度・除名による徴収不能額は198,000円

(資料2) 2011年度秋季大会における学生優秀発表賞の受賞者について

2011年度秋季大会において学生会員が行った発表（口頭およびポスター発表全26件）を対象に13名の審査員が構成した審査を行い、特に優秀な研究発表を行った以下の4名に学生優秀発表賞の授与が決定した。

- ・佐野恭平（北海道教育大学旭川校）
「微細組織観察から推定される白滝十勝石沢黒曜石溶岩の噴出過程」
- ・広井良美（東北大学大学院理学研究科）
「十和田火山平安噴火におけるマグマ噴火 - マグマ水蒸気噴火推移と本質物質変化の関係」
- ・畑 真紀（京都大学防災研究所）
「沈み込み帯での流体の移動と部分熔融: Network-MT法データによる広域比抵抗構造イメージング」
- ・濱田 藍（九州大学理学府地球惑星科学専攻）
「アナログ実験による柱状節理の形成過程の再現 entablature の再現を試みる」

日本火山学会 2011 年度秋季大会報告

日本火山学会 2011 年秋季大会は、大雪山・旭岳や十勝岳の活火山を背後にかかえる北海道旭川市で開催された。これまでで最北の地での火山学会となった。会期前後の野外討論会を含め、9月30日～10月5日の日程で実施された。公開講座、シンポジウム、特別セッション、ポスターセッションは、旭川市との共催として行われた。秋季大会の概要を以下にまとめた。

1. 学術講演会

a. 概要

学術講演会は、10月2日(日)から4日(火)午前中まで実施され、108件の口頭発表と77件のポスター発表が行われた。参加者数は281名(会員191名、学生会員40名、シニア会員8名、非会員41名(うち学部生16名)、団体会員1名)であった。

今大会の学術講演は、旭川市大雪クリスタルホールを会場として行われた。口頭発表は1階の大会議室(A会場、270名収容)と2階のレセプション室(B会場、120名収容)で行われた。「新燃岳 2011 年噴火」のセッションでの発表が多数を占めた。ポスターセッションは、同ホール内の旭川市博物館特別展示室で行われた(写真1)。旭川市博物館の特別企画展「日本の黒曜石と火山研究」と同時開催となった。ポスターセッションのコアタイムは10月2日の午後4時～(奇数番号)と午後5時～(偶数番号)に設定したが、一人当たりの発表スペースが比較的広くとれたことにより、実際にはあまり番号に関係なく発表が行われた。

また、今大会から学生優秀発表賞が設けられた。学生会員が発表する口頭またはポスター発表(全26件)を対象に、13名の審査員による公正な審査が行なわれた。その

中で特に優秀な研究発表4件が選考され、大会会場で表彰状と副賞(学会マグカップ)が授与された(写真2, 3)。

受賞者および研究発表題目は以下のとおりである。

佐野恭平(北海道教育大学旭川校): 微細組織観察から推定される白滝十勝石沢黒曜石溶岩の噴出過程
 広井良美(東北大学大学院理学研究科): 十和田火山平安噴火におけるマグマ噴火-マグマ水蒸気噴火推移と本質物質変化の関係

畑 真紀(京都大学防災研究所): 沈み込み帯での流体の移動と部分溶融—Network-MT 法データによる広域比抵抗構造イメージング

濱田 藍(九州大学理学府地球惑星科学専攻): アナログ実験による柱状節理の形成過程の再現—entablatureの再現を試みる

b. 日本火山学会賞, 研究奨励賞受賞者講演会

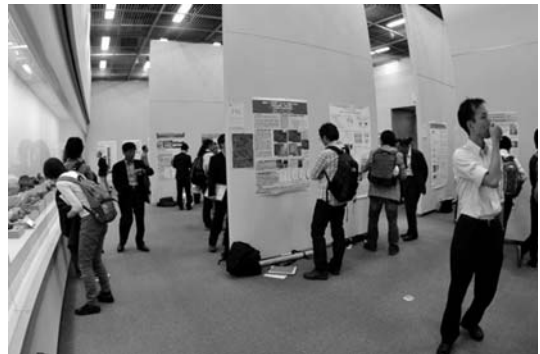


写真 1. ポスターセッション会場(旭川市博物館特別展示室)



写真 2. 中田会長から表彰を受ける畑 真紀さん



写真 3. 学生優秀発表者受賞者。右から佐野恭平さん、広井良美さん、濱田 藍さんと中田節也会長

10月3日の口頭発表終了後に、平成23年度日本火山学会研究奨励賞を受賞した鈴木雄治郎氏、福島 洋氏、そして平成23年度日本火山学会賞を受賞した巽 好幸氏の記念講演が催された。鈴木氏、福島氏の講演では、自身の研究の概要と今後の展望がわかりやすく紹介された。両氏の講演とも研究に対する熱意が伝わり、今後の研究の展開を期待させる内容であった。巽氏の講演では、過去の研究や地球物理学的・岩石学的データをふまえ、地球の真の姿を明らかにすることに対して、研究の着想から遂行、そして巽氏が提案するモデルが紹介された。さらに今後解決すべき問題の提示、若手研究者へのメッセージも含まれ、大変貴重な内容であった。いずれの講演も聴衆の心に響き、講演者に対して盛大な拍手が送られた。

c. 懇親会

会期の2日目、記念講演会終了後に、全館貸し切りとなった「大雪地ビール館」で懇親会が催され、約170名の参加者が集った(写真4)。会場に入場してすぐにウェルカムドリンクを楽しんだ。主催者挨拶のあとに、西川将人旭川市長、中田節也会長からの挨拶があり、鏡開きが行われた。アトラクションとして、アイヌ民族衣装を纏った川村アイヌ記念館・副館長によるアイヌ・ムックリの演奏と火山にまつわるアイヌの歌が披露された。浜口博之名誉教授、巽好幸氏のスピーチがあり、ジンギスカン料理や地元のお酒を楽しみながら、中川光弘氏の巧妙な司会によって歓談が進んだ。次回の秋季大会実行委員の武尾実氏の挨拶があり、最後に西田泰典名誉教授の挨拶で閉会となった。

d. 団体展示

学会会期中、7社(近計システム、メイジテクノ、白山工業、岩崎、ジオサーフ、ウェザーニューズ、アジア航測)の企業展示会が行われた。展示場所は、学会参加者多数が企業展示に興味を示してもらえるように、A会場



写真4. 学会懇親会(大雪地ビール館)

の側の休憩室内に設けられた。休憩室にはコーヒー・紅茶・緑茶を準備したが、ホールのロビー内で休憩をとる参加者が多く、休憩室を利用する参加者がそれほど多くなかったのは残念であった。また企業展示社には、ポスターセッションでも企業展示のコーナーを作って便宜をはかった。

2. 野外討論会

今大会の野外討論会は会期前と会期後の2つのコース(Aコース:十勝岳巡検、Bコース:大雪山・白滝黒曜石巡検)が用意された。

現地討論会Aコース「十勝岳巡検」は、学会のプレ巡検として藤原伸也、上澤真平、中川光弘の三名を案内者に、9月30日～10月1日の1泊2日の日程で行われた(写真5)。9月30日は、14時頃より十勝岳の望岳台から出発し、中腹の露頭で4,700～3,300年前に噴出したグラウンド火口火砕流を観察した。この中で、下位の火砕流堆積物の類質岩片の量が多いことなどから、その発生機構について議論になった。次に、その上位の中央火口溶岩を観察し、更に標高1100m付近で大正泥流堆積物を観察した。この後、一行は宿の十勝岳温泉、陵雲閣に入った。10月1日は朝から雪となり、当初予定していた登山コースを回避し、山麓コースとなった。8時30分より陵雲閣を出発し、ヌッカシ火口の噴気地帯まで散策し、その後、標高900m付近の沢沿いでグラウンド火口火砕流、大正泥流を観察した。最後に、十勝岳泥流防災センターに立ち寄り、昼食をとった後解散となった。あいにくの悪天候であったが、参加者からは好評を得た巡検となった。

Bコースの大雪山・白滝黒曜石巡検は、10月4日～5日の日程で、案内者・世話人(佐藤鋭一、和田恵治、佐野恭平、安齋圭亮)を含めて総勢29名で行われた(写真



写真5. 野外討論会、十勝岳巡検(グラウンド火口火砕流露頭にて)



写真 6. 野外討論会, 大雪山・白滝黒曜石巡検
(白滝・赤石山山頂にて集合写真)

6). 1日目は、学術講演会終了後、大会会場前に集合し、貸切バスで東川町の天人峡に向かった。ここでは大雪火山の噴出物を観察することができる。最初の観察ポイントでは、旭岳から流出した溶岩と御鉢平火砕流を遠方から観察した。その後、2箇所の露頭で御鉢平火砕流を間近に観察した。御鉢平火砕流には本質物質として軽石、スコリア、縞状軽石が含まれており、それらが同時に含まれる成因や縞状軽石の形成過程、火砕流の流動機構などについて議論が行われた。その後、宿泊先である層雲峡温泉に移動した。宿泊先では、入浴、夕食後、和田氏、佐野氏から翌日に観察する白滝黒曜石の概要、形成過程などが紹介され、参加者と多くの議論が交わされた。

2日目は層雲峡温泉から遠軽町白滝に移動した。白滝での最初の観察ポイントは赤石山の八号沢露頭で、ここでは赤石山上部溶岩の内部構造を観察した。ここは、黒曜石、発泡した黒曜石、流紋岩質溶岩の三層を同時に観察でき、その成因に関する議論は尽きなかった。その後、黒曜石の旧採掘場である西アトリエ、黒曜石広場で黒曜石球顆や花十勝など珍しい黒曜石の観察を行った。最後に赤石山山頂部溶岩で、球顆が非常に発達した黒曜石層を観察した。これほど発達した球顆を観察できる機会はめったになく、参加者は興味深く観察していた。観察終了後、白滝から旭川に向かい、JR旭川駅または旭川空港で解散となった。本巡検では、約220万年前に流出した黒曜石溶岩の観察を行うなど、火山学会の野外討論会としては異質だったかもしれない。しかし、参加者から後日、「黒曜石を堪能することができた」、「巨大な黒曜石の球顆をみて仰天した」などの感想が寄せられるなど、おむね好評だったといえる。

3. 公開火山防災シンポジウム「北海道の火山とともに」 10月1日の14:00~17:30に、公開火山防災シンポジ



写真 7. 公開火山防災シンポジウム (大雪クリスタルホール大会議室)

ウム「北海道の火山とともに」を大雪クリスタルホール大会議室において実施した(写真7)。事前に市民広報誌やチラシ、ホームページで広報した。参加者は一般市民も含め約90名であった。コンパネーターとして中村洋一(宇都宮大)と藤田英輔(防災科研)とで進められた。プログラム第一部では、旭川市教育長の挨拶の後、田邊敏也氏(壮瞥町教委)による「2000年有珠山噴火からの教訓:北海道の火山との共生」と伊藤和明氏(防災情報機構)による「歴史に見る火山災害」の基調講演が行われた。第二部のパネルディスカッションでは、パネラーとして山中漢(前壮瞥町長)、伊藤和明、宮村淳一(札幌管区気象台)、岡田 弘(北大名誉教授)、村上 亮(北大)、中川光弘(北大)、柴田哲史(旭川開発建設部)、荒牧重雄(山梨県環境科研)の各氏によって、北海道の火山と災害の教訓、十勝岳の火山防災、火山と共生するための防災について問題点や今後の在り方を中心に質疑応答を交えて議論がなされた。

4. 公開講座「火山学者と火山をつくろう! マグマのおもしろ実験教室 in 旭川」

火山学会では例年、大会開催に際して火山学を一般市民に分かりやすく伝える取り組みを行っている。ここ数年は「火山学者と火山を作ろう」と題して、一般市民と交流しながら火山の噴火現象を再現する実験を行っている。本年度もここ数年の流れを継続して「火山学者と火山をつくろう! マグマのおもしろ実験教室 in 旭川」を学術講演会前日の10月1日に午前・午後の部に分けて、旭川市博物館で開催した(写真8)。午前・午後ともに一般の講座参加者は約35名で、その半数以上が小学生であった。また、本年度はこの取り組みに際して科学研究費補助金(研究成果公开发表、課題番号2353001)を得ることができた。

今回、午前・午後ともに2名の講師による実験が行われた。午前は、佐藤鋭一氏による「マグマの中のガスを確かめる~黒曜石のふしぎ発泡実験~」、林信太郎氏に



写真 8. 公開講座「火山学者と火山をつくろう！
マグマのおもしろ実験教室 in 旭川」の様子

よる「マグマを爆発させよう！コーラの爆発実験と麩の火山灰実験」、午後は、林氏による「コンデンスミルクとココアでエア溶岩をつくろう！」、境 智洋氏による「歯科印象材を使った成層火山形成実験」を実施した。境氏は本来野外で「マグマを流そう！灼熱の溶岩を流すアナログ実験」を行う予定であったが、雨天により室内実験に変更した。実験には「火山学者」として本公開講座の司会を担当した吉本充宏氏、さらに、宇井忠英氏、和田恵治氏、小杉安由美氏、梅津 茜氏が加わり、実験全般のサポートをして頂いた。また、学生サポーターは実験のサポートをする他に、活動の様子をデジタルカメラで記録し、参加者のつぶやきを記録した。

参加者は、講師の丁寧な説明、火山学者・学生のサポートもあって、積極的に実験に取り組んでいた。火山噴火のように実際にはなかなか経験できないものをダイナミックな実験によって再現することは、参加者にとって純粋に感動を呼ぶものであるとともに、自然科学への興味をかき立てるものだと思われる。このようなアウトリーチ活動を今後も継続して行うことが火山学を含め自然科学の普及に重要となるだろう。

今回、活動の最後に一般の参加者ばかりでなく、講師や学生サポーターからもアンケートを集めた。また、活動の様子はボイスレコーダーで記録しており、アンケート、参加者のつぶやき、活動中に参加者に記入してもらったワークシートなどを基に林氏が教育的な解析を行う予定である。今回の公開講座では、各講師が実験の概要をまとめ、林氏によって編集されたカラーのテキストが使用された。このテキストは、火山学会のホームページから PDF でダウンロードすることができるので、広くご利用頂きたい。また、今回の公開講座は、10月2日の北海道新聞紙上で紹介された。

5. 大会の運営をふり返って

旭川市で開催された今大会の会場選定は、100名以上の収容人数を2会場確保でき、また昼食の場も確保できて、旭川駅にも近い、旭川市が所有する大雪クリスタルホールとした。現地実行委員会を7月と8月の2回、プログラム編成会議を8月に1回行った。旭川に居をもつスタッフだけでは手薄で、学会準備は大変であったが、火山学会大会委員長及び北大スタッフの協力を得て、会期中の運営においては大きなトラブルもなくほぼ円滑に行われた。前回京都市大会での運営に関して作成された手引きは、事前準備において役に立った。火山学会の開催について、マスコミへ随時情報を提供し、事前に旭川市観光課が作成した学会歓迎ステッカーを市内各所に依頼した。

今大会では、公開シンポジウムと公開講座、特別セッション「火山のジオパークと教育・火山防災」を旭川市教育委員会、旭川市博物館との共催事業とすることで、市民の参加を促し、さらに会場費の節約に役だった。またポスターセッションの会場も旭川市博物館の特別展示に合わせて実施したことにより、会場提供を受け、博物館入館の便宜もはかってもらった。この特別展示の開催は11月上旬まで続くため、ポスターも展示物として来館者に見ていただきたいとの意向が博物館から寄せられた。多くのポスター発表者がその要請をこころよく受け止め、ポスターを撤去せずに継続掲示したことで、特別企画展は成功裡に終わり、博物館側から感謝された。火山学会と旭川市との共催に関しては、9月30日に、篠原宏志副会長、吉本充宏氏、藤田英輔氏、現地実行委員2名の5名で旭川市長への表敬訪問及び旭川市博物館館長への挨拶を行った。

講演会場の初期セッティングは、打ち合わせに基づき、ホール側の技術スタッフによって行われた。B会場はやや狭く、後方の座席からスクリーンが見にくかったという意見があった。また発表者がPCとプロジェクターとの接続に手間取る場面もあったが、全般にはスムーズに進行していたと思う。

懇親会の会場は、貸し切りとはいえず手狭で1階と2階に参加者を分けなければならなかったが、大きな不満は聞かれなかったのは幸いであった。今回は事前申込みで参加者を募った。

会期中のアルバイトスタッフは、北海道大学と北海道教育大学旭川校の大学院生・学部生の15名と、全国公募による応募者1名であった。会場係、受付などの業務をシフト制で行った。受付では火山学会ロゴマークが印刷された記念マグカップの販売がなされた。

学会会期中はちょうど天気が悪い時期にあたってし

まった。天候が良ければ、大雪山や十勝岳の山並みが市内から見られただけに残念であった。秋季大会は一般市民も少数であったが参加することができ、大変有意義な大会となった。市内の高校生によるポスターセッションの企画も当初考えたが、時間がなく叶わなかった。今後は学会を一般市民により開放する方向で企画していくことも必要と思われる。

6. 実施体制

今回の大会実行委員会の体制は以下の通りであった。
 現地実行委員会：和田恵治（北海道教育大）、中川光弘（北大）、吉本充宏（北大）、青山 裕（北大）、向井正幸（旭川市博物館）
 大会委員会プログラム編成会議：松島 健（九大、大会担当理事）、下司信夫（産総研）、市原美恵（東大）、和田恵治、中川光弘

公開火山防災シンポジウム：中村洋一（宇都宮大）、藤田英輔（防災科研）

公開講座：林信太郎（秋田大）、佐藤鋭一（神戸大）、和田恵治

野外討論会：Aコース；藤原伸也（国際航業）、上澤真平（北大）、中川光弘、Bコース；佐藤鋭一、佐野恭平（北海道教育大）、和田恵治

学生優秀発表賞審査員

下司信夫、金子克哉（京大）、小林哲夫（鹿大）、松島健、中川光弘、中村洋一、中尾 茂（鹿大）、奥村 聡（東北大）、奥野 充（福岡大）、嶋野岳人（富士常葉大）、田村芳彦（JAMSTEC）、海野 進（金沢大）、和田恵治

（文責：和田恵治・佐藤鋭一・上澤真平・藤原伸也・松島 健）

磐梯山ジオパークのお宝は子どもたち 火山学会 （磐梯山第12回地震火山こどもサマースクール）

日本火山学会と日本地震学会が1999年から開始した地震火山こどもサマースクールは、日本地質学会が今年から参加し、磐梯山を舞台に2011年8月6日、7日の両日に開催されました。小学生から高校生までの21名が、竹谷陽二郎実行委員長（福島県立博物館専門学芸員）のもとで、「磐梯山のお宝さがし」に挑戦しました。

最初のテーマは「役場の3階から見える磐梯山の風景」。そこで気づいたことや不思議に感じたことを5つのグループに分れて話し合い、その結果を各代表が発表し、実行委員長からカードが渡されました。

磐梯山は岩なだれ（岩屑なだれ）の山

最初のフィールドは猪苗代リゾートスキー場のゲレンデです。2番目のテーマは、「ゲレンデから南の方向に、磐梯山がくずれたものがかくれている所を探す」。このゲレンデからは、約4万年前の翁島岩なだれ（岩屑なだ

れ）による流れ山地形を見ることができますが、木々に覆われているため、子どもたちは悩みました。各代表が発表し、実行委員長からカードが渡されました。

午後は、林信太郎さん（秋田大学）による岩石を溶かした溶岩実験の観察からスタートです。磐梯山がマグマでできていることを感じ取る実験で、子どもたちは真剣に見入っていました。

火山を作る実験は楽しい

歯科印象材を使った成層火山を作る実験を全員で行いましたが、なかなかユニークな火山ができていきます。火山研究者からは成層火山でも様々なできかたがあり、おもしろいという評価で、カードが子どもたちにどんどん渡されていきます。次に、宇井忠英さん（環境防災



写真 1. 磐梯山の風景の発表



写真 2. 翁島岩なだれの流れ山地形を望む



写真 3. 歯科印象材を使った成層火山の実験



写真 4. ココアを使った火山のくずれの実験

総合政策研究機構)の山のくずれについての解説です。林さんのココアを使った火山のくずれ実験では、そのリアルさに火山研究者も大感激。多くのカードが子どもたちの手に渡りました。次に岩なだレンジャーの登場です。これは直径30cm長さ2mほどの透明のビニール袋に様々な大きさの発泡スチロール材を入れたものを使って、目の前に流れてくる様子を見せるものです。最初に作った成層火山を太いストローでボーリング調査をし、ナイフでカットして内部構造を観察し午後の部を終了しました。

東北地方太平洋沖地震

夕食後、松澤 暢さん(東北大学)による「東北地方太平洋沖地震」のお話を聞きました。

その後、「火山の部屋」「地震の部屋」「日本ジオパークの部屋」「磐梯山をジオパークにする部屋」「磐梯山の歴史の部屋」の5つに分かれ、各グループから参加し話を聞きました。終了後、それぞれが聞いてきたことを各部



写真 5. 銅沼での解説

屋で報告し、一日目はこれで終了。

1888年の噴火も岩なだれ(岩屑なだれ)

二日目は、磐梯山の北側にある裏磐梯スキー場へ。気象庁の観測機器について、中村政道さん(仙台管区気象台)が解説をしました。ゲレンデの西側にはどうして崖があるのか、宇井さんから話を聞きました。リフト終点では、1888年の岩なだれで作られた地形を眺め、藤縄明彦さん(茨城大学)が解説しました。その後、磐梯山の火口を望む銅(あか)沼へ移動し、火山の内部構造を観察しました。昨日観察した翁島岩なだれと同じ現象が1888年にも北側で発生していたことを実行委員長が解説し、山を降りました。

15時から各グループが、「磐梯山の現在・過去・未来」「磐梯山のすごいところ」「これから磐梯山とどうつきあうか」「磐梯山のお宝は」というテーマから3つを選び発表しました。地元のこどもたちは、一泊二日の間に磐梯山をよく理解し、この火山と楽しく付き合っていくと目を輝かせていました。磐梯山のほんとうの宝は、この山を愛する地元の子供たち自身だったのです。

こどもサマースクールから2週間後、ジオパークの現地審査の際に、こども達が審査員の前で「岩なだれ」のポーズを決めてくれました。9月5日、磐梯山は日本ジオパークに認定されました。こども達のこの活力が磐梯山の火山理解の増進となり、ジオパークを発展させる源となるでしょう。

2012年の地震火山こどもサマースクールは、8月25日、26日に新潟県の糸魚川ジオパークで開催されます。

佐藤 公(磐梯山噴火記念館)